

黒川廣二というお名前の、無線の大先輩が居られた。悲しいことに、昭和 46 年に現役の技師長で亡くなられた。無線支部でも年配の方は、お名前にご記憶があろう。筆者は 10 数年のお付き合いであるが、忘れられない恩師の一人である。

最初に黒川様のご尊顔を拝したのは大学 4 年のときである。早稲田大学電気通信学科に「無線工学」という科目の講師として来られていた。たくさんいる学生の顔など、講師の側は通常ご記憶にないであろうが、筆者はいつも講師の真ん前の最前列に陣取っていたので、何となく見覚えて下さったかもしれない。

次にお目にかかったのは、筆者を指導して下さいていた松本高士博士（25 年入社）が「尊敬する先輩だからお目にかかっておきなさい」と言って、千駄ヶ谷の黒川様のご自宅に連れて行って下さった。黒川様は、入社してまだ数年しか経っていない若造にも楽しく話をして下さいした。

それだけのご縁なのに筆者は昭和 39 年、「フランスに留学します」と言って東京通信局長で居られた黒川様にご挨拶に伺った。当時、東京通信局は溜池から六本木の方に行く通りの左手にあったが、局長室が広く立派なのに驚かされた。黒川様は部屋に招じ入れて下さり、「お祝」を下賜して下さいした。感激の極みであった。

公的な場でお目にかかったのは昭和 41 年、筆者が技術局無線部門の調査員のとき、局という垣根を超えた無線屋の会合が有楽町の中華料理店で開かれた場である（無線会と正式に呼称したかについては定かでない）。この会は谷池宏氏（26 年入社）が中国通信局施設部長で栄転される歓送会を兼ねていた。このとき黒川様が「これからの無線屋は電電公社のことを幅広く知らなければいけない。施設部長は、その勉強をするのに最適な場である」と言われたのが耳に焼き付いている。

昭和 46 年 1 月、筆者は東北通信局施設部長に任命された。このことを黒川様に報告に参上したいと願ったが、このとき黒川様はすでに病篤く、面会ができる状態でなかった。黒川様はその月の 29 日、世を去られた。その葬儀に筆者も出席したが、同じく無線を専門とする千野孝副局長（24 年入社）から「自分が東北を代表して行くので君は遠慮するように」と言われ、仙台を離れられなかった。



【黒川廣二博士】

この年の電信電話記念日（10 月 23 日）、副局長の指示もあって青森電話局の敷地に超短波多重電話方式の記念碑を建立した。その碑文には「昭和 15 年 5 月に青森と函館を結ぶ超短波回線が開通した。電話 5 回線と

ラジオ放送 1 回線を同時に伝送することができる世界で初めての方式で、米澤滋、黒川廣二両工学博士により実用化された」と書かれている。

それから多くの年が経ち、黒川様の 23 回忌の日であつたらうか、小口文一元技師長（18 年入社）の発案で無線専門の数名が千駄ヶ谷の黒川邸を訪問、黒川様の位牌に線香を上げさせて頂いた。黒川未亡人はご丁重にもてなして下さいし、いろいろ思い出話をして下さいした。

そのとき、見目麗しい女性にお目にかかった。お聞きしたところでは黒川技師長の秘書をされて居られたとのことだった。長年過ぎて、未だに命日には秘書が弔問に来られる。黒川様の類まれなお人柄に皆が改めて感じ入ったのであった。

その女性は、日比谷同友会前常任理事の小野塚久枝先生である。専門的に得られた学識を基に、同友会の希望者に相続・贈与・遺言の個別相談を受けて下さっている。令和 7 年 10 月 23 日はその相談日であつたので、事務局に若干のお時間を頂くお願いをした。近頃とみに足腰が弱くなり、遠出が難しくなってきたので、動けるうちに長年のご厚誼にお礼を申し上げるとともに、本稿にお名前をお借りすることのご承認を頂くためである。

令和 7 年に 99 歳で亡くなった渋谷茂一氏は、黒川様をよく存じ上げる一人であつた。彼は黒川様について次のように評している。「黒川様は容姿端正、誠実温厚な貴公子であつた。それと同時に、最も無線を愛し、無線の未来を予見し、無線のために戦った情熱の人、無欲の人、下町の人情に厚い江戸っ子であつた」。